



(奈良)

奈良・東大寺旧境内 三社池

さんしゃ

1 所在地 奈良市雑司町字三社

2 調査期間 一九九〇年(平二)五月〜七月

3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所

4 調査担当者 今尾文昭

5 遺跡の種類 寺院園池跡

6 遺跡の年代 一一世紀〜現代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

三社池は、東大寺東南院に付属する池で、『東大寺諸伽藍略録』には東南院主聖法親王の時に庭前の池に三社託宣の名号が顕現したとある。すでに鎌倉末期には池は存在したのであろう。

『東大寺中寺外惣絵図』をはじめとして、江戸時代の絵図にも東大寺南大門の外側東南には小池が描かれている。池は形を変えながらも現在につづく。

今回の発掘調査は、付近

一帯に対する奈良県の公園整備事業の事前緊急調査として行なったもので、池の西側を中心とする約六四〇㎡を調査した。

調査の結果、過去三時期にわたる池の輪郭があらわれた。当初の池の汀線は、現在(調査時点)の池から一二mあまり西側にあり、直線的に約二〇mつづく。池の西南隅からは吉城川に向かう排水溝が開削されている。池は肩部から中央に向かって地山を整形した緩やかな勾配を示し、洲浜風を意図したものと思われる。ただし排水溝のとりつき付近に小砂利の敷設が一部あったが、調査範囲の中で敷石を施したり、景石を配したりした痕跡はない。池内部の堆積層位内には、一二世紀前後の土師器皿・瓦器碗が主体となって含まれる。隣接の石組井戸内には一一世紀代の黒色土器碗の出土もある。調査成果によるならば、池の開削時期は、平安時代末期以前にさかのぼる可能性が高い。

8 木簡の积文・内容

紹介の卒塔婆は、当初の池の最終堆積層の上面で検出したものである。合計七点あり、およそ頭頂を南に揃えたような状態で出土した。

卒塔婆にはいずれも頭部に梵字が記され、その下に仏画が描かれているが(挿図参照)、それらは省略し、下端にある供養の願文のみを积文として掲げる。なお、番号は発掘調査時のとりあげ順になっている。



(1)表

(1) ・「値中興兼順教房法印

二七日忌景起立塔以令

嘯絵尊像奉□^{〔備カ〕}浄□直因

者也仍含識晋利

延識房白敬

天正六年早秋□□□

・「釈迦如来

□□

1813×191×16 061

(2)

・相当□□□

□□為祈出離生死□□

刻一基奉□□□

千□院

天正七年初秋十日 隠居」

・□□不思議善常

□□身大牟尼名法

(930)×195×17 061

(3) ・「相当興兼順教房法印

二七日之光景刻彫法身□□^{〔究カ〕}

竟之制底奉資成等正覚

之妙楽者也乃至晋□□^{〔利カ〕}

高□^{〔田カ〕}

天正六年七月廿三日 専修院隠居白敬

・「□□即□□□

□□後生清浄

1814×177×17 061

(4)

・□□□

・□□水□入来盡夜□□

□□入諸北辰」

1821×195×13 061

(5)



千

天正六年^{〔七カ〕}月^{〔二カ〕}日

延[□]

・「南無観自在

1830×200×14 061

(6)

「相当興兼順教房法印初七日

但天
而已 尊像者也

□順

天正六年七月十六日 清[□]敬[□]

1820×188×14 061

(7)

・「相当真兼法印百日

□奉塔□一基供養乃□



善観

天正六年七月 日

経真^{□□}

〔白カ〕



1809×178×14 061

卒塔婆は七点ともほぼ同形同大で、すべて中ほどの左右・下半中央に釘穴がみられる。建築部材も同一面で検出しており、検出の卒塔婆は卒塔婆堂の壁面を構成していたものと考えられる。この大型の卒塔婆は、民俗例では「絵塔婆」といわれるもので、初七日から三十三年忌までの各忌日に十三仏信仰にともなう追善供養に用いられた。本例では順教房法印の初七日に不動明王(6)、二七日に釈迦如来(1)の絵尊像が描かれており、十三仏信仰に則った卒塔婆であると考えられる。

さて(1)(3)(6)の順教房法印は、『多聞院日記』に名がみえる。『多聞院日記』には順教房法印の葬礼、三五日、百カ日、一回忌に関わる記述があり、出土卒塔婆の供養願文の年月日と合致する。従って卒塔婆に記された人物は、『多聞院日記』の興福寺僧順教房法印と同一人物と考えられるのである。さらに東大寺真言院境内には、「順教房法印」の銘のある背光形五輪塔が現存しており(後掲)、出土の卒塔婆はこの五輪塔を囲う小堂に供されたものとみられるのである。調査地付近は南大門外にあたるが、草創以来の東大寺境内である。にもかかわらず興福寺僧の卒塔婆堂が付近に存在した可能性は高い。これは東大寺と興福寺の戦国末期の関係を示す一資料となろう。そして近世初頭の南都諸寺の再編のなかで卒塔婆堂が解体され、それに伴って、池に卒塔婆が廃棄されたものと考ええる。

なお釈文は和田萃氏による。また東大寺史は堀池春峰氏、『多聞

院日記』の記載は水野正好氏、卒塔婆については藤澤典彦氏に多大のご教示を賜わった。

9 関係文献

和田 萃「東大寺三社池出土の絵塔婆」『仏教史学研究』三四—一九九一年

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『大和を掘る——一九九〇年度発掘調査速報』（一九九一年）



（今尾文昭）

（釈文）

順教房法印

（カ）
逆修興兼

天正六戊寅七月十日

（『寧楽』一四 一九三一年、による）

奈良・藤原宮跡

- 1 所在地 奈良県橿原市高殿町
- 2 調査期間 第六一次調査 一九九〇年（平2）四月～八月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 牛川喜幸
- 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡
- 6 遺跡の年代 七世紀末～八世紀初頭
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
調査地は藤原宮大極殿院・内裏の東外郭東側および東方官衙地域の西辺部にあたり、調査は第四次調査区の北に接して調査区を設けて実施した。調査面積は一一〇〇㎡。
検出した遺構は弥生時代・藤原宮期・平安時代および中世に属する。藤原宮期の主な遺構には、大極殿院・内裏外郭の東を限る南北掘立柱塀SA八六五、SA八六五の東方に位置する南北溝SD八六九・東大溝SD一〇五・南北溝SD八五〇の三条の溝、東方官衙の西を限る南北塀SA六六三〇と官衙内の掘立柱建物などがある。
木簡は、SD一〇五から二四点（うち削屑五点）、SD八五〇から五六点（うち削屑九点）、計八〇点が出土した。
SD一〇五は藤原宮東半地域の基幹排水路で、最大幅五m、深さ